露國征伐劍舞獨習圖解

225
670

特23
126

露國征伐參考獨習圖解

井口適心齋著

東京　博文館藏版

明治
37 6 13
交内

劍舞獨習圖解序

王耶酒酣にして、劍を拔き地を研つて莫哀を歌ふてより、劍を拔いて舞ふ者、皆曲に和して歌はざるなし。我邦青年の子弟、劍舞を以て其志氣を鼓舞するの具となす、亦當年王耶が抑塞磊落の奇を鼓するに出づ。

適心齋劍道に通じ、又柔術に長ず。劍舞の態を研究すること、亦年あり。乃はち其研究の結果を公にし、名けて劍舞獨習圖解といふ。圖以て

舞態を示めし、曲に和する所以の者、三たび思を致せり。青年牢騷鬱勃の氣、庶くば之に依つて鼓勵一番を得るに幾からんか。況んや時方さに國家大戰の際に當る。以て兵氣を振作し、以て民心を激勵するに於て、其裨益する所、必らず尠からざるべきを確信す。

明治三十七年四月下浣　　犀東居士識

序

井口君は、武道に於ける予が莫逆の友なり。予、少うして子を識り、君の後世必ずや、武道に貢献する所あらんことを信じて疑はざりしなり。果せる哉、屬者、一書を著し、之に題して、露國征伐劍舞獨習圖解と云ふ。稿を予に示して、其序を徵せらる。予、再次之を辭す。而も君之を容さず。是に於いてか、之を一讀するに、未だ劍舞の何物たるを知らざるものに向つて、之を知悉せしめ、傍ら尚武勇敢の氣象を涵養せんとするにあり。其勞や、以て多大なり。其功や、以て偉とするに足れり。君曰く、方今劍を拔くことをすら知らざる輩にして、劍舞と稱して、其書を公にしたるもの鮮かなら

舞態を示めし、曲に和する所以の者三たび思を致せり。青年半驅鬱勃の氣、庶くば之に依つて鼓勵一番を得るに幾からんか。況んや時方さに國家大戰の際に當る。以て兵氣を振作し、以て民心を激勵するに於て、其裨益する所、必らず尠からざるべきを確信す。

明治三十七年四月下浣　　犀東居士識

序

井口君は、武道に於ける予が莫逆の友なり。予、少うして子を識り、君の後世必ずや、武道に貢献する所あらんことを信じて疑はざりしなり。果せる哉、屬者、一書を著し、之に題して、露國征伐劍舞獨習圖解と云ふ。稿を予に示して、其序を徵せらる。予、再次之を辭す。而も君之を容さず。是に於いてか、之を一讀するに、未だ劍舞の何物たるを知らざるものに向つて、之を知悉せしめ、傍ら尚武勇敢の氣象を涵養せんとするにあり。其勞や、以て多大なり。其功や、以て偉とするに足れり。君曰く、方今劍を拔くことをすら知らざる輩にして、劍舞と稱して、其書を公にしたるもの鮮かなら

ず。之を一讀するに、抱腹絶倒、殆ど讀むに堪へざるものなるのみならず、兩々相對して演舞をなすに當り、劍を横に揮ひて薙ぐが如く、之が法則に違ふもの、實に少なからざるが如し。蓋し劍舞は、士氣を興奮する一助たれば、敢て其法則に拘泥するにあらずと雖も、苟も劍道に適はしめざるべからず。否らざれば、法は、應に無用たるに至るべし。予が、本書を公にするもの、宜しく法に則つて以て、劍舞の一端を知得せしめんとするにあり。故に最も劍法の重んずべきを採りたるなりと。善い哉言や、是れ大に予が素志に適するものなり。君は、嘗て柔術劍棒圖解、武道圖解秘訣、天神眞揚流柔術極意教授圖解の如きは、吉田千春氏と相謀りて、世に公にしたるものなり。又死活自在接骨療法柔術生理書、早縄活法柔術練習圖解の如きは、故久富子と丶もに、相謀りて公にせられたるもの、而も十數年の久しきを經るも、嘖々として世に賞用せらる。其他武術に關する著書少からず。而して汎く世に用ゐらる。君の意志、是に於いてか、殆ど貫徹したるものと謂ふべし。然るに今又、現下の時局に應じて、世を益せんとして、爰に本書を編述するに至れり。誰か、其熱心にして他を顧みざることを躊躇せざるの元氣の愛すべきを推するに難からん。依て其の稿を閲するに、俗に所謂、痒き所に手の屆くの感なくんばあらず。思ふに本書は、幾多の劍舞書中に於いて、確に一頭地を

拔くもの、誰か欽仰敬慕せざらんや。予、此の稿を返すに當り、一書を裁して以て著者の前に呈せん。

明治三十七年初夏　　辱知　淡崖老人識

自叙

日露砲火を交へ膺懲義戰を開くの今日に當つて余が本書を著述する所以の者蓋し其理なくして可ならんや、抑も余幼少の頃より武藝を好み、日夜研錬茲に年あり、又明治二十年以來武術の書類を刊行して世の便益を計り、又武藝各專門の諸名流と計りて著述せるもの其類鮮少ならず、就中世人の特に記憶に存すのものは柔術劍棒圖解、武道圖解祕訣、天神眞揚流柔術極意教授圖解、死活自在接骨療法、柔術生理書、早繩活法、柔術練習圖解、直心影流劍術極意教授、神刀流獨習劍舞圖解教範、諸流弓術極意教授圖解等にして其他數種の出版を世に公にせり、此等の書

籍は皆な余が多年研修の武術に鑑み、一字一句一進一退、悉く實驗の眞技に出づ、其經歷を略叙せば、天神眞揚流の柔術極意を明治十九年に究め、同く棒の手は淺山一傳流にて棒術二流を究め、長卷の形は田子信重先生に就て神保流を究め、早縄は警視流を、劍術は直心影流を、居合は田宮流及び香島神道流幷に立見流を究めたり、是れ自ら其技能を誇るの譏を招くに似たれども、敢て斯術に就ては他人に後るゝなきを自信すればなり、今や我國の艨艟貔貅は遠く滿韓の天地に出征して、連戰連捷の快絶を報ぜり、千古未曾有の戰時に處する者誰か悠々安臥を事とせんや、況や余の性質は余の武術を促がして遏まざるをや、

茲に於て世の詩人名家の作に成れる征露大捷軍歌等に劍舞及び軍舞踊りの手を附し獨習の册子として年少氣鋭の士の便利に供せり、此書微々たる一遊戯書に過ぎざるも、一躍萬化して一座活氣を生ずるに至らば、所謂國民の志氣を喚起し、敵愾勇敢の壯心を鼓舞するに於て、至大の神力あること言を俟たざるなり是れ余が本書を出版して敢て戰時に貢献する所以なり。

明治三十七年五月

著者識

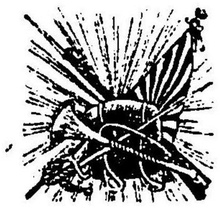
露國征伐 劍舞獨習圖解目次

○劍舞の主意……一
○本書の由來……五
○十ヶ條の心得……九
○身躰の備へ……二四
○居合の心得……三三
○劍　舞……四三
△大陸西伐曲（其一）……四三
△大陸西伐曲（其二）……五四
△征　露　歌……六九
△開仁川全捷……八四
△拔　軍　功……一〇八

△吾國民……一二二
○軍舞……一四二
△軍舞の主意……一四二
△出征軍歌決死の出立……一四三
△征露軍歌：(一)圖解入大和魂……一七〇
△征露軍歌：(二)圖解入……
○名家軍歌集……二〇八
△征露軍歌……横井忠直君作……二〇八
△旅順海戰歌……某少佐作……二一〇
△全捷軍歌日の惠……春郊書伯作……二一五
△海戰大勝利：(外數首)：M、I、……二一六
○名家軍詩集……二二一
△聞旅順海戰大捷……二二二

△俎上魚……二二四
△野獸國……二二四
△抑歸客……二二四
△演活劇……二二五
△是啞聲……二二五
△露將軍……二二六
△有前兆……二二六
△全回航……二二七
△膽如斗……二二八
△不如走……二二九
△遁將軍……二二九
外數首

劍舞獨習圖解目次終



露國征伐 劍舞獨習圖解

適心齋　井口義爲著

劍舞の主意

天に在りては、蛟龍を兩斷し、地にありては、虎豹を僵し、水にありては、鯨鯢を截ること絶だ易々たるのみ。光芒離々、星斗の燦爛として、一條の光を曳くがごとく、これを取つて月影に翳せば、秋水流露、將に滴らんとす。嗚呼、是れ三尺の鐵のみ。而して鍛錬してこれを致す。豈に人工の最精最華なりと謂はざるべけんや。日本刀の銳利なるは、天下既に其の比なし。漢人動もすれば、干鏌莫耶の銳を說くもの少なからずといへども、これを日本刀に比すれば、實に一の鈍鐵棒たるに過ぎざるを知るべし。夫、兵を談じ、劍を說くは、正に大丈夫の事なり。天下泰平に沈湎し、一世婦

弱の時に方りて、鞘を拂ふて、刀を拭ひ、一揮百揮、青電白虹の氣、劃犀斷蛟の利をして、其の鋒鋩を試みしむるは、豈に、有心漢の一大快事ならずや。予、生來日本刀を愛し、未だ曾て坐右を退けたることあらず。

蓋し刀劍は、其の鍛錬するや、我邦固有の長技にして、此の金甌無缺の國體と、ともに、尙武勇敢の氣象と相待つて、其の鋒光の鋭尖快利を宇内萬國に輝かし、且つ最もこれを誇るに足れり。惟ふに神代に於いて、既に刀劍の鋭利なるもの少なからざりしが如し。畏も天叢雲御劍のごときは、實に天下の至重至寶にして、三種の神器の隨一と云ふべし。降つて神武帝以後、尙武の美風、上下に遍く、士人は、最も劍を貴ぶ。是に於いてか、刀劍鍛錬の術、年を逐ふて、益々精鋭を極め、鎗倉時代に至りて、最も其の精妙且つ隆盛を極むるに至れり。抑も我邦の技術文學は、概ね韓漢より傳來せざるはなし。然れども特、刀劍は我邦固有の特伎にして、其の精妙鋭利萬國に冠絶す。是れ實に大に偉とするに足れりと謂ふべし。

抑も刀劍は、士人の英魂氣魄にして、一たび鞘を脫すれば、明晃々として四邊に輝き、如何なる懦夫も、ために奮起せざるはなけん。これを揮ひて、勇躍するときは、誰か自から心神の快哉を叫ばざらんや。英國の驍將「ウエルリントン」一日「イートン」校に登り、偶〻學生の競技の勇壯活潑なるを見て、大に感嘆して曰く、「ウヲーターロー」の一戰、能く英國の運命をして、斯くのごとくならしめたるものは、爰にありて存するか、と。されば「ナショナルゲーム」は、啻に體育の上に著大の効果を結ぶのみならず、國民の元氣を煥發し、依りて以て國運の伸張するに裨益なるは、論を待たざるなり。我邦のごときも、常に一般に重用せられ、實戰に於いて、其の特技を顯したるもの、實に枚擧に遑あらざるなり。若し予をして忌憚なく言はしむるときは、我邦開闢以來、三千餘年の歷史を有し、國體の精華、宇内万國に冠絶するは、畏くも歷朝上に聖天子の在しますあり、下國民が、能く聖旨を奉戴して、外侮を禦、

ぎ、尚武の風を養成したるに由るものと謂ふべきか。然らば今日我邦の東洋に重を置かれ、將に宇内に雄飛せんとするもの、實に上下此の美風に養成せられたるの素因あるに依らずんばあらず。『ウエルリントン』の感嘆したる、當に吾人と其の感を同じうすべきを信ず。

夫、撃剣のごときは、『ナショナルゲーム』として、其の効最も多大にして、士氣をして奮興せしめ、身體の危急、間髪を容れざる機微に際して、能くこれを脱することを得せしめ、延いて懦弱の悪風を助長せしめざる等、吾人常にこれを確信す。幸ひに其の嗜好に從ひて、其の剣法の一斑を解したるを以て、これを廣く人士に公示し以て習得せしめんことを希望すといへども、未だ其の機の熟せざるを憾む。然るに古來剣舞なるものなりて、衆人の知るが如く、剣を揮ふて、一場の演舞をなすものなり。固より竹刀を用ゐ、兩々相對して、虎龍相搏撃するがごとき壯觀に乏しといへども、觀者をして奮起勇躍せしむるの効、蓋し多大なるものあらん。即ち此の奮起勇躍せる元氣は、やがて國民の頭腦に印し、延いて全土に瀰蔓せば、剣舞の効や、豈に鮮少ならずとせんや。

抑も剣舞なるものは、固より一定不動の規矩準繩あるにあらず。從つて聊屈なる法則に縛らるゝものにあらず。されば己が好む所によりて、演舞をなすや、曰く否。假令規矩準繩の束縛を受くるにあらずと雖も、自から其の舞踊に適ふ所あらしめざるべからず。故に、其の高吟する所の詩句の意を了得し、これに、よりて其の動作をなすべし。是れ舞士の深く省察せざるべからざる所なり。

本書の由來

予、嘗て武術の興隆せんことを希ひ、知人有志に謀りて、演武場を設立せんことを企圖し、將に其の緒に就かんとするに際し、暴戻恣睡、貪婪饕くことを知らざる野蠻未開の北狄たる露國に向いて、世界の平和のため、將た人

道の敵として、これに一大膺懲を加へざるべからざるの境遇に際し、宣戰の大詔は煥發せられ、爰に不倶戴天の暴露を討伐することゝなれり。時は、戰に際し、擧國一致、偏に義勇奉公の外、餘念なきに至りしは、流石は、我が大日本帝國の眞價を發揮したるものと謂ふべし。然るに斯の軍國多事の際に於いて、假令今直接に、効果を求むべからずといへども、間接に國家を益する所の演武場を設立するは、實に忠心忍び難きものあり。何となれば、零碎の資も、積んで以て軍資の萬一に供することを得れば、演武場設立に要するの資は、これを轉じて軍國の用に供するの優れるに若かざるは、識者を俟たずして知るべきなり。然れども、予も、帝國々民の一人として、微意の在る所を公表し、以て國民たるの義務を盡さんことを希望し、時局に對して、最も適切なるものを求めしに、尚武の美風をして益〻發揚せしむるに足るべき事をなさんと欲し、爰に本書を公にするに至れり。これを戰場に携へて、野營の陣中に行へば、士氣の勇躍すること、蓋し、平生に倍蓰するものあらん。若し夫れ內地に居れる青年諸子にして、これを繙き、これを演ずることあらば、髮は冠を衝き、腕を扼し、劍を撫し、以て國民の元氣を興奮するに於いて、蓋し多大の効果あらんことを信ず。予が將に成らんとする素志たる演武場設立を中止し、以て本書を公にするに至りしもの、實に之が爲めのみ。

凡そ劍舞に於いて、最も重んずる所のものは、活氣の發動するにあり。若し活氣にして、發動せざらんか、恰も繰人形の動作を見ると等しく、奚ぞ士氣を皷舞し、これをして勇躍せしむることを得んや。抑も活氣なるものは、如何にして發動することを得べきや、唯劍を揮ふて勇躍するのみにして、決して發動し得べきものにあらず。故に先づ演ぜんとする所の詩意を知了し、此の詩は、如何なる境遇に在りし時、これを作成したりしや、彼の詩は、如何なる際に於ける作に成りしや、先づ主としてこれを究め、以て其の眞意を了解することを得ば、舞士は其の詩意の境遇を寫し、以てこれを

動作に表はすことを得るなり。故に劍は自から鞘を脱し、手足は自から勇躍奮興して、以て詩中の人と化すべし。是に於いて、始めて劍舞の妙味を發揮し、演舞場裡、風雲起り、電光閃き、觀者をして知らず識らず、發奮せしむるに至る。予、自ら揣らずして、爰にこれを公に致せしもの、實に前述のごとし。仰ぎ願くは、諸子幸にこれを演じ、以て傳播せられんことを。斯くのごとくなれば、國民の士氣を發奮する上に於いて、偉大の効果あらんを信ず。

十ケ條之心得

第一條　鎮靜の心得

常々歩行の時にも拇指を手の平へ折込兩の手にて我睾丸を圍む心得を忘るべからず而して胸を鎮め口を結び歩行しながらも八方へ眼を配り如何なる響きにても驚かず鎮靜に臍を据ゑ尤下腹に力を入れ居る事を寸時も忘るべからず

心得の歌に

「歩むにも眼は八方に口結び
拇指は折込めきんは圍めよ

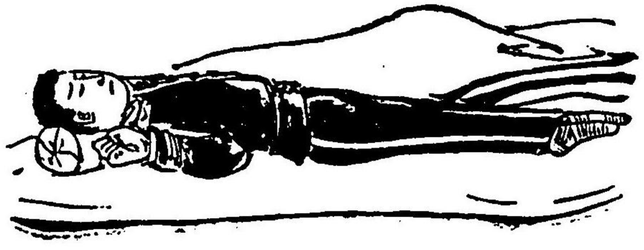
第二條　氣合の事

敵に出合或は不意に邂逅せる事あれども前條に述ぶる心有れば直に氣合を起し又は敵を切る時にも「エーイ」と聲を發する勢ひを出して切りつける時は勇氣充滿して敵を充分に切り果すことを成得べきものなり

心得の歌に
「行成に出合ふ心の治まりて
エーイト聲をば掛て切るべし

第三條　寐る時の心得

凡て寐る時は小便を宜くたれて臥すべし左すれば不意討に合ふとも騒ずに心を靜め敵の樣子を計り心靜に起上ることを心得べし尤も寐に就く時は痰は吐くべく唾は呑むべし身躰に力を入れ



て一度兩腕を伸ばし拇指を手の平に圍み下腹に力を入れて伏すことを忘るべからず又仰向に寐て鼠の小便など目に入たる時は猫の小便にて洗べし猫に小便をさせるには大根をろし汁を呑ませば忽にするものなり

心得の歌に

「いばりしていぬれば不意に出合ふとも
心さわがず物にうごかす

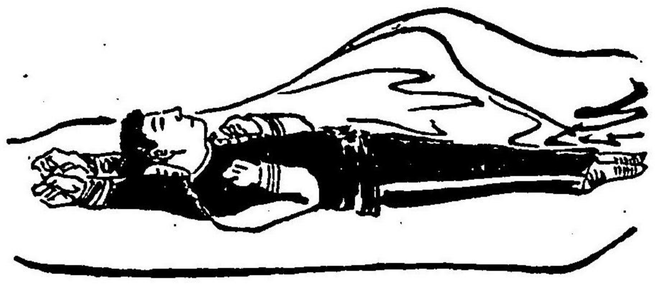
第四條　起る時の心得

眼を覺したる時は仰向に成り前條の如く兩拳を上に伸すと共に兩足も充分に伸して下腹に力を入れて口を結び靜に兩腕を縮め、乳の邊り迄下しながら力を入れて止めるなり是を三四回行ふとせば身躰に勇氣滿ち其儘にて靜に起ることを毎日忘るべからず

心得の歌に

「教をば守る心の起居には
勇氣躰に滿渡り鳧

第五條　大小便の心得



常々大小便を支えさせ居るは不注意の至りにて就中心得置べきとなり尤敵に向ひ又敵に出合などする時は尚更のことにて太刀疵を受或は銃砲の玉疵を受けたる時小便支へ居れば夫が爲に縡切て僅かの疵と雖手あての屆かざるとあり左なく共小便の支へ居る時は凡て物事に充分氣の入り悪敷して心の落着安からざるが故に不意の際などには必ず遲れを取ると有ものなり大小便共云ふ迄もなきとなれども殊に小便の支へざるやう注意すべきは前々述べし如くにして如何なる場合と雖心を靜て小便を爲すべし餘り驚きたるか又は急なる場合にたれかたきとあり是等は尤氣を落着くべきの至りなり取分武術の稽古にかゝる時は小便を能くたれて後に爲すべきと心得居るべきなり尚々心得置くべきとは柔術にて絞落たる時活を入る際に小便を走せ洩すとあるが故に構へて忘るべからざる事なり

心得の歌に

「垂るべきを」故なく我慢なさずとも
　心にかけてするぞ安けれ
「筧」にも止れる水の何とせん
　事足らずして源ぞ溢るゝ

第六條　敵に向ひたる時の心得

先敵の樣子又は暗夜に人聲こ或は足音の遠近を計り殊に群勢の多少を知らんと欲ば地盤に耳を着け心を落着て聞く時は充分に聞えるものなり譬へ大群たり共前條を心得心靜に左の手の平へ勝と云ふ字を書是を左の拇指にてしかと押し殘り四本の

指にて握り口元に押しあて手を開くと共に唾にて下腹へ呑込み而して敵に向ふ時は身方少勢なりとも必勝利なること疑なし

「佛法に九字十字の勝守りたる敎へ有り

心得の歌に

「暗き夜に敵の有かを知るとせば
　地に耳つけて靜かにぞ聞け

第七條　煙に卷れたる時の心得

戰地にて砲煙に卷かれたる時は地上へ頭を着け心を鎭め敵の居る方角如何を見定るべし左すれば立

去るとも敵中へ進入すると
も自由を得るとなり又火事
場にても地上二尺以下は煙
なきが故に此も同じく地上
へ頭を地につけて逃れ道の
如何を知るべきなり若し過
つて煙中へ立つ時は忽ち煙
に卷かれて死するものなり

心得の歌に

「煙立つ軍の中の敵身方
地に貌つけて見るぞ安けれ

第八條　場所の心得

先づ敵に向ひたる時は我足
元を見定め小石又は木の根
などの無き所へ身構へ万一
吶喊にても一騎討は尚更の
と足元の地盤を前に氣をつ
けると肝要なり尤風雨は脊
に受て闘うべし風雨煙砂塵
など眼に入るの恐れあるが
故なり

心得の歌に

「木の根また小石に足のつまづきは
　強きも負けの初めなりけり
「闘は脊に雨風を負ひぬべし
　見張る眼に害となりせば

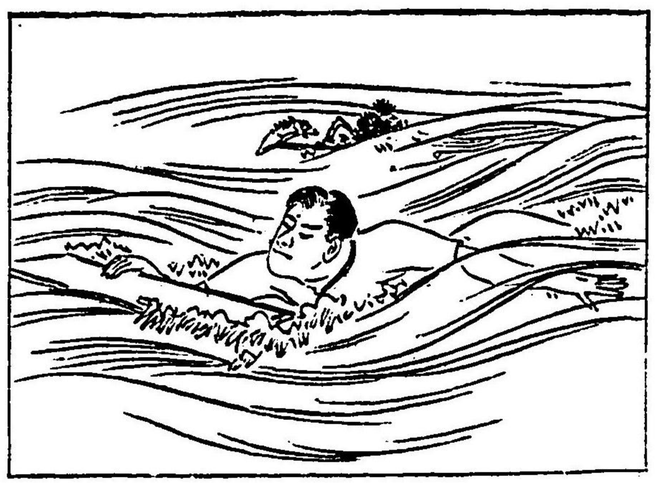
第九條　水に出合たる時の心得

先づ知らざる土地或は山川に向ひ連日の降雨にて堤など切出し爲に押流さるゝとありかゝる時は手ごろの木材又は板切等にても獲物を持居れば譬へ激流に押ながさるゝとも必ず水中に渦込まれること

となし又更に水心なき者と雖手に持たるところの木切等を放さず持居る時は身躰水上に浮みて溺死を免がるものと知るべし

「佛法の十字の内にて大風雨に向ひたる時左の手の平に龍と云ふ字を書拇指にて押へしかと握り口に押宛唾にて下腹へ呑込べし此詳細は柔術生理書にあり

心得の歌に



「大水に流さるゝ身の助けには
木切れ板切れ持とこそ知れ

第十條　酒を呑たる時の心得

大酒を爲したる時は凡べて武術の稽古又は大聲を發し或は劍舞等を爲すべからず酒を呑みたる時は息切れ早く手足の自由を妨げるが故に總じて害となると多し殊に陣中などにて空腹の時

大酒を爲すは謹むべきの限りなるべし
酒と雖少量に呑居れば多少元氣を增し强ち之を禁しむる迄の物にもあらず併し敢て好まざる者は幸にして是にしくことなし
不意は何時來るや期すべからざるものなれば何程の勇者にても手者にても大酒の爲に身躰の自由を妨げられ日頃修め置きたる切角の武術も其功を成さゞるの不覺を取が如きは尤も一身を守護するの一大緊要と心得べき事なり

心得の古歌に

「酒は只呑まねば須摩の浦さびし

すぐせば明石波風そたつ

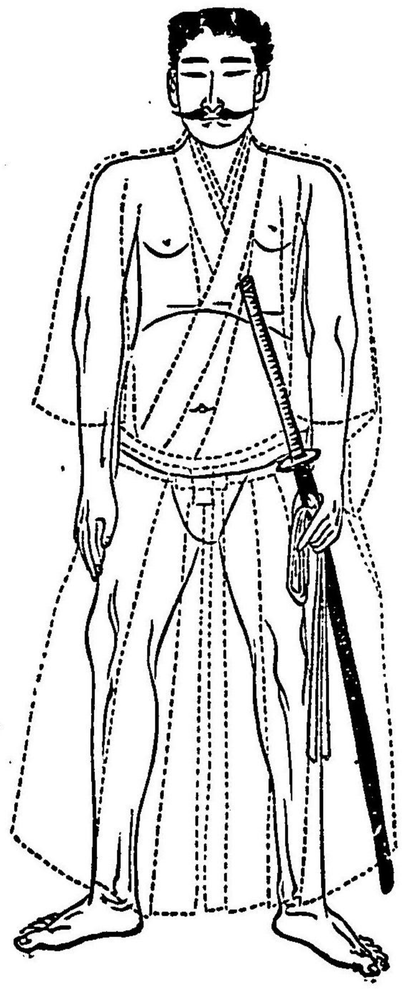
「酒呑めば物云ふ聲もあらけなく
稽古仕合も息ぎれぞする

武道を學ばんとするものは毎日此十ケ條を熟讀すべきことなり

身躰の備へ

夫躰備へをなすには行成座敷又は廣場にても剣舞、軍舞、壯士舞等を舞はんとするには其廣し狹しを能々見込んで自身の充分働ける程を見計らひて先づ見物人に向へば夫れを敵と視做して演ずべきなり

本圖は躰を三角に取り此を魚鱗の構へと云ふ次に立つて座敷の角から角み見物總躰を見廻し眼は正面を見張り唾を呑込口を結び下腹へ力を入るべし



本圖は刀を持ちながら左の膝をつき右の膝を立て右の手は圖の如く半拳にして右の足元とに突き禮をなすべし

本圖は左の足を左三角へ立つて踏出し右の膝を突き圖の如き躰にて袴の股立を取るべし

本圖は左の膝を突き右の足を右三角へ蹈み立て正面を切り左手の拇指にて刀の鍔を押へて圖の如き樣に持ち右手にて下緒を取つて此を引拔き次圖の躰に移るなり

本圖は前に拔き取りたる下緒の端を口に加へ右手にて持ち左手の裏側より外へ向けて引き掛け順を逐ふて活動圖に移り次ぎは第六圖に就きて見るべし

本圖は順を逐ふて右の手に掛け左の手に持ち替たる處にして次圖に移り見るべし

本圖に移りて口に加へたる下緒の端を取り褌に掛け畢りて結ぶ樣を見て知るべし

本圖は鉢巻をなす様にて鉢巻は白木綿又は白地の手拭にても二尺五寸の物を四つ折か六つ折に畳みて圖の如くなすと然り

此の構にて居合にても剣舞にても隨意になすべきなり

居合の心得

先づ居合を嗜には剣術柔術凡て武術の心得は刀の拔指しを第一の主眼となすべきもの一眼と唱へて武術は總じて眼の配り

方を心得べきとなり

第一圖に示す處は口を結び正面を見込左手にて刀の鍔際を握り鍔に拇を掛け鍔を押し鯉口を切り示指を伸し左手を前三角みへ張り伸し右手は五指を揃へ胸より臍の下迄撫下し下腹へ力を籠め兩足は八文字に圖の如く蹈揃へ尚充分氣合を籠めて八方へ氣を配る事右足は前へ向き左足は左斜めに蹈締め並べて兩足共指先に力らを入れ踵は充分地につけるを定法と心得べし

第二圖に示す處は刀を拔く術を詳解するとにて鯉口を切りたる儘ま刀を左

より臍の邊りへ寄せ付け右手を鍔際に掛け小指より力らを入れ柄を三指にて掴み示指を伸し拇指の先にて中指の頭を押へる心持にて腰を据ゑて第三圖に移る

「身躰の構へは顔より兩足の爪先に到る迄第一圖の如く躰を崩すべからず

「刀を拔く時は鞘を反り身にして拔き放つと

第三圖に示す處は霞とも横一文字とも云ふ刀の拔き放ち方を詳らかに解

くには第二圖より引續き左足を一方後ろへ引くと同時に腰に力を入れ少しく撚りながら力を籠めて「エイヤッ」と氣合を入れ掛聲と共に横霞に拔き付けたる處圖の如し

拔放せば刀の切先へ眼を注ぎ夫れより上段なり晴眼なり自在の働きをなすも刀の拔方は總べて是に止るものと知るべし

「晴眼とは兩眼と鼻の間だを云ふ

「立ちて刀を拔く時は此の身躰を崩すべからず

「凡て刀を拔く時は拔手三分鞘を引手が七分なることを心得べし

第四圖に示す處は右手は前圖に解く處の法則にて左足の膝つき形を說かんとするには左足を後へ一足引膝をつくとなり尤も爪先に力らを入れ踵は我

肛門の處へ附けるを定法とす同時に下腹へ力を入れ此の圖は腰を伸ばしたる處にして右足は爪先に力を入れ立て膝をなし正面を切たる構へなり又右膝を突もすべて同樣にて此の構を以て刀を拔くも前條に記する通りにて心得べきと

圖には右手を右股へあて臂を張つて身躰に力らを籠めたる樣なり

尙常に心得べきとは右手の拇を手の平に折り込我睪丸を圍む心にて歩行するにも忘るべからず

第五圖は刀を鞘に納める心得にして凡て刀を鞘に納る時は鯉口を拇指と示指とにて蟹鋏の如くなし

あと三指にて握り刀の脊を摺扱ながらにて圖の如く刀の刄を上へ向けて納るなり尤正面を切り兩足を蹈揃へ刀を納むるとを心得べし

詳解圖なるものは既に鯉口に刀の切先の納りかゝりたる處なり

「刀を納る時の心得は下緒の處を小指より三指にて握り拇指と示指にて蟹鋏の如く爲して納めきるなり其際鍔口にて左手の指を痛めざる樣注意すべし

劍舞

大陸西伐曲（一）

犀東居士作

大陸風雲手可攀
出營北望積氷山
十年爲汝磨長劍
不擒虜將不生還

是れ犀東詩宗の新作にして博文館發兌大陸劍歌の一首なり見る人々左の演舞姿勢圖と註解を了得し能記憶したもふべし

大と吟ずる時は刀の鍔際を握り鍔に拇指をかけ右足を左三角に蹈込み右の手を足と共に左三角へ指し

陸と吟ずると共に右足を右三角へ蹈開くと同時に手も又右三角を指すと活動圖と點線と矢の印しとを見て知らるべし

風と吟ずる時は兩足を蹈開きながら躰を少し左の方へそらせるが如くなし右手は指を寄て風を厭うが如き樣となり

雲と吟ずると共に手を股の當りへ下すと活動圖の如くなるべし

「尤此の形ち畢ると同時に兩足を揃へながら次圖に移る

手と吟ずる時左足を左斜に後ろへ蹈み開き同時に兩手を拳にして圖の如く爲し

可攀と活動圖の如く胸の當りにて兩拳を搗合せるやうに爲と共に左足を右足の元へ引寄て直立するなり

出營と吟ずる時は直立し扇子にて左方の頭より引かけて右方を指と同時に右足を蹈み開く時出と吟ずる拍子と知らるべし

北望と吟ずる間は扇子を指て望み見るなり

積氷と吟ずる時は右足を左三角へ蹈出す同時に扇子を刀の柄の上へ平に出し山と吟ずると共に右足を右へ開き扇子を持たる手共に頭挿す形ちとなり尤とも活動圖と點線と矢の印しとにて知らるべし

十年……と吟ずる時は左足を左三角へ蹈込左手にて十年を指折算右手の示指にて此をしめし

汝……と吟じながら右足を左足の元へ引と同時に我胸を打と活動圖にて見らるべし

「十年」と數をするを左拇指より二三本指を折るべし

前圖にて汝のと胸を打ち直ちに刀の柄に手を掛るべし

「向を見きわめて居合腰になる

爲…と吟ずると共に霞に拔はなすなり

「尤も霞に拔つけるは何も同一なれども他の霞は拔つける直ちに大上段に振冠りて切下すなれども此形は只霞に拔つける迄のものなれば其心して見らるべし

長劍…と吟ずる時は直ちに右の膝を突左膝を圖の如くに立て下に砥石の有る心持にて刀を圖の如くに爲し左手を拳にして刀を押る躰に爲し研形ちを二度するとなり

「立ながらに刀を鞘に納めるべし

虜將……と吟ずる時兩の手を拳にして左の足を揚て虜將を蹴倒樣をなし

不擒……と吟ずると共に足を蹈下し虜將を足下に蹈敷たる形ちを爲すと同時に左手を伸し押しふせる樣を爲すとなり

「活動圖の樣になり下腹に力を込て兩腕も力を入るなり

不生還」と吟ずる時左の膝を突右の膝を立に前へ蹈出し右の手を拳と爲て刀の柄を押へつけ下を見つめ

不……と吟ずると共に左手にて刀の鍔際を持たる儘右手の拳にて押へたるまゝ左手にて刀をこぢ揚ると共に上を向少しそり身に爲りて畢る

「活動圖の樣になりて畢る

大陸西伐曲（二）

蹴破雪華千萬重　大呼陷陣髪皆衝
黑龍西去鮮卑路　立馬興安第一峯

是又犀東詩宗の作にして大陸劍歌の一なり其作や非凡其勇や溢るゝが如く其趣味や濃なり依つて劍舞の手を附して演武の料に充つ

先直立して腰の扇子を取り蹴破と吟ずる時扇子を開き頭挿と共に右足を揚て蹴破る樣となり足を下すと同時に扇子も下し次圖に移るべし

雪……と吟ずる時右足を揚て左り三角へ出すと共に扇子も左り三角へ出し其儘にて扇子を綾どり少し飜とさせながらに華……と右の方へ向くと活動圖と點線と矢の印とにて知らるべし

「尤此形ちは躰を働かせるに際し踵を蹈締爪先に力を入れて活動すべし

千萬……と吟ずる時右足を右後ろへ蹈み開き扇子を疊兩手にて腹の右側へ中引つけ重……と吟じながら咖そり身に爲り左り方を見揚るなり

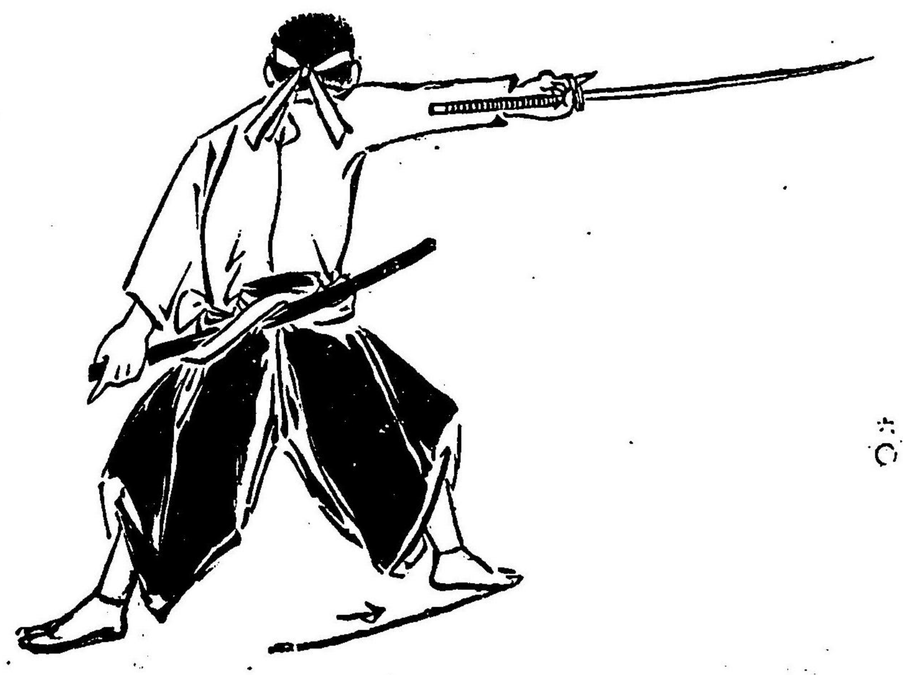
「尤頭に番號を附しある二の印あるを見て知るべし

大呼……と吟ずる時右足を左三角へ蹈込むと同時に扇子を廣げ左へ出し直ちに右足を右へ蹈み開くと共に持たる扇子を後へ投ると圖の如くにして活動圖と點線と矢の印とにて知るべし

陣……と吟ずる時直ちに刀の柄に手をかけ拔ながら次圖に移るなり

此圖は左の方へ進むが故に文も又逆に書きあれば其心にて左の方より見たまへ

し線を見て知らるべなり足の歩びは點充分に突出すこと込むと同時に刀を



を見せ右足を蹈然の理にして脊る形になるは自覽人へ脊を見せて次圖の如く觀が故に身は飜つ分左の方へ蹈込に持ち右足を充刀を圖の如構へ陷……と吟ずる時

髮……と吟ずる時
自然定坐に直り
直立して刀を鞘
に納めると圖の
如し

「尤此間は成丈繰上
て刀を納め置かず
ば刀にて過つ恐れ
あり

皆……と吟ずる時
手を兩乳の邊に
指を揃へて圖の
如く押あて
衝……と吟ずると
共に兩手を衝揚
ながら指をひろ
げ上を向き是と
同時に左足を少
し左方へ蹈出す
と活動圖にて見らるべし

黑龍……と吟ずる時右足を左三角へ蹈込み左三角の方より下を指さしながら右三角へ右足を蹈開くと共に指さしたる儘右三角へ移る此は河をさす心持なり圖の運は活動と點線と矢印にて知らるべし

西去……と吟ずる時右足を左後斜に蹈開き指にてさすは西に去と云ふ趣にて

鮮卑路と吟ずると共に點線と矢の向とによりて後廻りに右足を右の方へ蹈み直るべし手も又此に隨うと活動圖を見てしるべし

立馬……と吟ずる時足を蹈み廣げ左手は定式の如く刀の鍔際を握り右手は袴を掴みて馬の手綱に擬して少右方を見遣り右足を小股に一歩蹈出すべし

「左足より右足とも一歩つゝ前へ出るべし

興安……と吟ずる時横一文字に拔ながら屹度身構へを爲し直ちに次圖に移るべし

「刀を拔時は必左手引充分に引べし拔手三引手七と知るべし

第一峯……と吟ずる時刀を左手に移し是を直に板間へ突立左足は鍔に蹈掛處圖の如し峰を見揚る樣なるが故に右手を高く頭挿て畢る

「刀を地に突立るは切先を思ふ故左手に持つ儘右手を以て遠方へ見上る樣をなす充分に氣込を入最稽古刀なれば地立もよし

征露歌

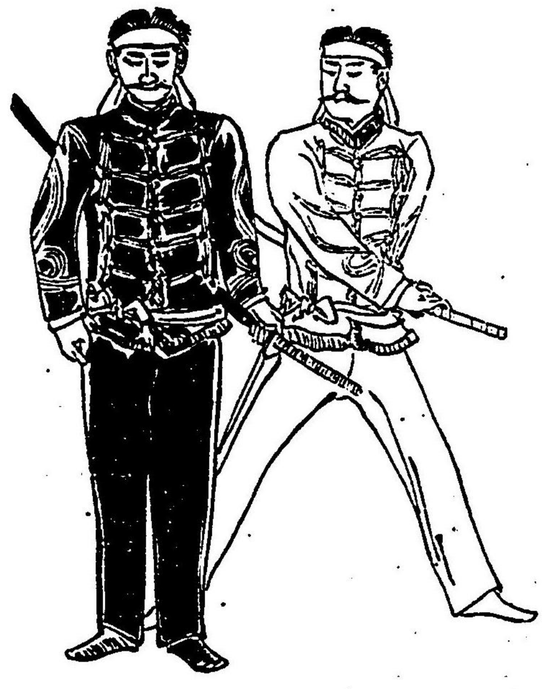
到處貔貅敵愾多　衝天意氣滿山河

街頭兒戲擬兵唱　福島將軍征露歌

此は日露交戰開ける當時諸新聞に掲げありたるものにて詩味最も劍舞に適するを以て特に舞の手を附したり演舞者宜しく圖解に依り此詩を暗記すべし

到處……と吟じながら左足を一歩前へ蹈み出すと同時に刀の鍔に拇指を掛け足先の向たる方へ突き出す

右手を刀の柄に掛活動圖の構へになるべし



貔貅……と吟ずると共に左足を一歩後ろへ引きながら横一文字に刀を拔く圖の構へになるべし

「刀を臍の邊りに拔附刃を前へ向け腰を少しく屈め向を見るべし

敵……と吟じながら大上段に刀を振り冠り右足を大きく左三角へ蹈み込んで切下す直ちに爪先に力を入れ身を飜へし第四圖に移る

移ると同時に脊を見物の方へ見せる慨……と吟じながら刀を振冠り直ちに第五圖に移る

「此れは速時身躰をくりかへし大上段に刀をかぶりかけの處を見せるなり

本圖に移ると同時に多……と切下し瞬速に正面へ向ながら刀を鞘に納むるなり

「刀を鞘に納めるには兩足を踏揃て納むべし

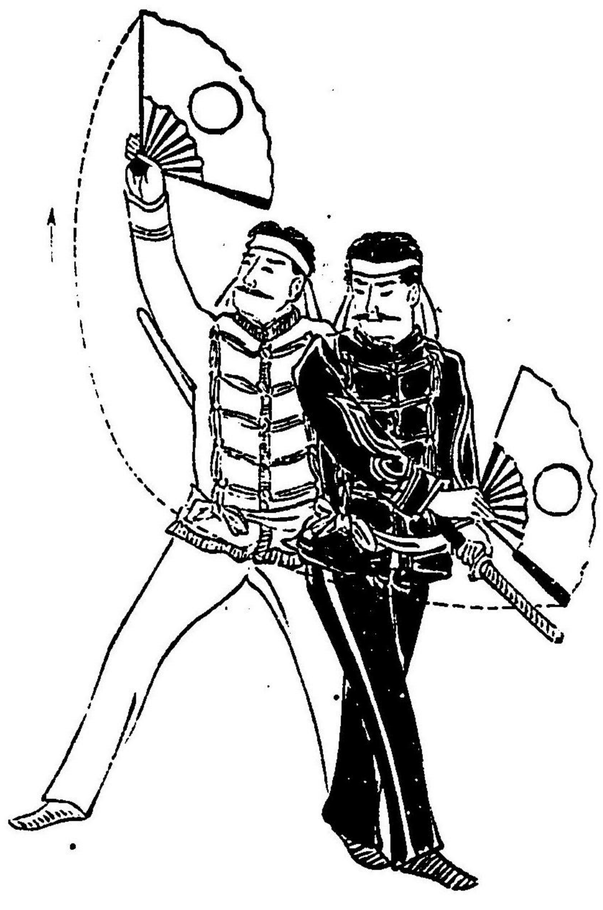
天……と吟じながら上を見て直に兩拳を兩乳の邊りに圖の如き構へにて衝……と吟ずると共に右足を前へ斜に大きく蹈み出す同時に下腹へ力を入れ兩手を衝き上ぐると共に圖の如き樣になるなり

意……と吟じ直ちに左手の拇指を刀の鍔に掛け左足を前へ斜に出す同時に右手の拳を振上げ下腹に力を入

氣……と吟ずると共に拳に力を入れ左腕を氣合を込て打と活動圖の如し

山河……と吟じながら扇子を開き刀の柄頭に圖の如くの手にて禦ると共に右足を左三角へ蹈込み

滿……と吟じながら右後ろへ大きく右足を活動圖の如く扇子を持手とも同時に高く頭挿と圖の如し



街頭……と吟じながら兩足蹈揃へ扇子を開きたる儘左へ手足共蹈込み直ちに元の如くの樣になる圖の如し

「此も前の圖と同樣になることをしるべし

兒戯……と扇子を疊み左手の平を打ち

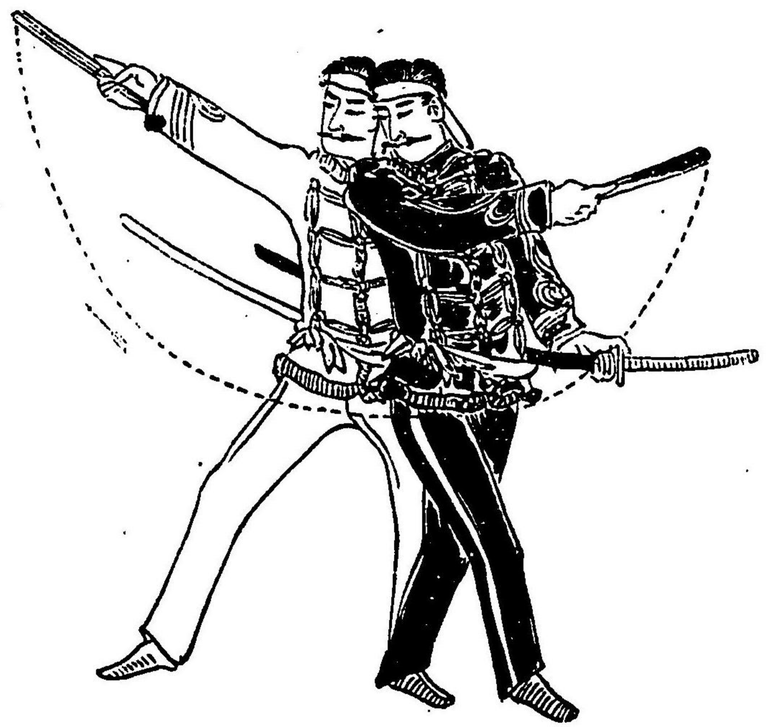
「小兒の戯れ居る心持の躰なり

「顏を前に向き小兒を愛する心持なり

兵……と一時直立して直ちに右足を左三角へ蹈込

擬……と扇子にて左三角を差ずと共に唱……と吟じながら右足と共に右後へ大きく開く手つきは圖の如し

「本圖の顔は持居る扇に眼を附つくべきなり此顔向は畫の誤也



福嶋將軍と吟じながらに直立し左手は刀の鍔に拇指を掛けながら一歩蹈開くと同時に扇子を開き下腹に力を入れ大將たる心持を爲す樣圖の如

征露……と吟じながらに右足を左足へ蹈揃兩手足揃へ開き圖の樣になり直ちに柄に扇子を禦せ直ちに次圖に移るべし

「右足を左三角前蹈込て直に開くとなり

歌……と吟じながらに左足を右足の元に蹈揃へ爪先に力を入れ下腹に氣合を籠め扇子を高く頭挿ながらに伸び上りて畢る

「正面へ向ひて充分の氣込を見せて畢るべし

聞仁川全捷

仁川港外礮聲轟　擊碎虜船擒虜兵
八道山川一時震　王師早已入韓城

此は仁川全捷の報ある日、日本新聞に掲載したる犀東詩宗の作なり

仁…と吟ずる時は直立して左り手は刀の鍔に拇指を掛け右手を拳にして鍔際を押へて正面を見込み

川…と吟ずると同時に右足を前へ斜に一歩蹈出し手は圖の如く頭挿見る躰なり

港……と吟ずる時右足を左へ斜に蹈込み右手は足と共に左へ斜に指さしながら次圖に移る

「指先へ眼を附て點線の如くに開くべし」

外……と吟ずると同時に右足を元の處へ大輪に蹈出しながら右の方を指さす事圖の如し

ヽ……と吟ずる時腰を少し屈め左足を蹈み出し兩手を拳にして砲を打つ構をなすと圖の如し

聲……と吟じながらにして直立し兩腕を握りて組み足を開くと同時に兩手を瞬速に開くと圖の如し

一聲と充分の下腹に力を込て兩腕を上へ開くべし

轟……と吟ずる時第六圖の如く尤も本圖へ移ると共に直立して直ちに右足を右前へ斜に大きく一歩踏み出し兩手を圖の如くになして下腹に力らを入れ兩手の大きく斜めに開くと手のさばき方等は凡て圖の如し「身體を斜めに開くべし

虜……と吟ずる時兩手を握り軍艦の梶を取る如き樣をなすと圖の如し

船……と吟ずる時直に居合腰なると同時に刀の柄に手を掛ると圖の如し

次圖の如くにして

ン……と云ひながら刀を圖の樣にして霞に拔きつけると圖の如し

「切先に眼を附け充分の氣合を込む」

擊……と吟ずる時は直に大上段に振冠り圖の如き樣に構へるなり

「向を見込んで氣合を充分に入れ

碎……と吟じながら「エイヤ」と掛聲をなし右足を一方前へ踏込んで切下す樣圖の如し

「直に兩足を踏揃へると同時に刀を鞘に納めるべし

虜兵…と吟ずる時驚きたる樣をなすと圖の如くにして直ちに次圖の體に移るなり

「吟じながら後へ兩手を廻しながらに

忽本圖に移り擒…と吟じながら兩腕を脊に廻し縛られたる樣をなしながら左足を大輪に左りの方より廻しめ脊を見せて踏止ると圖の如し

前圖より移る際直ちに前へ向きながら

八道……と吟ずると共に圖の如き構へになり右手の示指にて左の手を差し左の指にて八道を算へるなり

尤下腸に力を入れ足は圖の如き構へになすと

山……と吟ずると共に左手にて刀の鍔際を握り右手にて高きを向ふ指さすと共に右足を踏込む圖の如き構へなり

川……と吟ずると共に右手にて高きを指さしたる儘にて右足を引兩足を踏揃へると共に眼下へ指をさすと圖の如し

一時……と吟ずると共に左足を引く同時に居合腰になり刀の柄に手を掛け拔放すが否や次圖に移り見るべし

震……と吟ずる時前圖より移りて直ちに圖の形になり片手上段の構へをなすべきなり

尤震ふと吟じながら片手上段の構へをなすと同時に右足を一歩前へ踏込と圖の如し

王師……と吟じながら刀を脊に廻し兩足を踏揃へ脊を見せると圖の如し

「右足を左足の元へ寄せると同時に左足の爪先を左にまはせば背を見せる樣になる

早……と吟ずると共前へ向き斜の構へになり右手足を一歩後へ引圖構になり直ちに前へ手足共大きく突出すと共に次圖に移るべし

本圖に移る際已……と吟じながら充分に突き出すと圖の如し尤左の手にて鯉口を握り居るとき

「切先に眼を附るべし

韓城……と吟じながら兩足を踏揃へ尤足先を八文字となす

「刀を鞘に向を見ながら早く納めるべし

入……と吟じながら左り足を引いて膝をつき左手は刀の鍔に拇指を掛け右手を右足際へ拳にして突き禮をなすと圖の如くにして畢る

拔軍功

兵士輕命重功勳
單身躍馬入虜群
血滴大刀不遑拭
直提首級謁將軍

此詩は素と雲井龍雄逸題に有之所の舊詩なるを頭の一字を著者都合にて壯士を兵士に替字して征露歌に利用し圖解を附したり。

兵士……と吟ずる時は右手に扇子を握り圖の如くになし尤扇子の先に眼をつけると「扇子」無き時は指差にても宜ろし左手は拇指を刀の鍔に掛け殊に扇子は刀の柄頭より右向ふ三角の方へ右足と共に下腹へ力を入れ進むる勢ひを見せると圖の如し

輕命……と吟ずる時は右足を左の足元へ引つけ兩足を八文字に直立して右手にて扇子の平を以て胸を打と圖の如し

「命をと云時扇子は右へ開き輕じて云時に我胸を打つべし

重功勳とずる時は左の足を蹈廣げ腰を屈め兩手にて恭しく拜をする躰圖の如し

單身……と吟ずる時は右手を握り我胸を打つと同時に左足を一歩前へ蹈出し左手も同時に前へ出すと圖の如し

「左手に刀を別に持しは書の誤なり腰に差してあることゝ知るべし

躍馬……と吟ずる時は左り足を引くとたんに居合腰にて刀をかすみに拔て前に進み指揮する心持にて刀を拔と共に右足を前にむると圖の如し

虜群……と吟ずる時は大上段に構へ向ふを見込んで下腹に充分力を入れ「エイヤ」と云ふ掛聲と共に右足を一歩前へ蹈込ながら居合腰にて切下すと其形ちは次圖の如し

「これは横側より見たる圖

入……と吟ずる時前に記すごとく氣合を入れて切下したる處は圖の如し「尤腰を下げ下腹に力を入れ血滴大刀と吟ずる時は腰を下げたる儘手先にて刀を三度血拂をする心持にて振ふと圖の如し

「血拂とは居合の秘傳に在て圖に顯し難き故切先を三度切込様をすべし

不遑拭と吟ずる時左り手にて左りの袴の裾を掴み刀を拭ふ樣を爲し順序は右足を後へ引と共に刀を拭ふ躰を見せると圖の如く

忽……と吟じながら右足を大きく後ろへ引き大上段に構へ「エイヤ」と云ふ掛聲と共に下腹に充分力を入れて切込ながら次圖に移り

マチ……と云ひ「エー」と云ふ掛聲と共に右足を大きく蹈込み大上段にて切下すと圖の如し

首級……と吟ずる時に右足を引膝をつき刀を下に置き右手は鉢巻の後ろを掴み左手は額の方へ添へてはずすと圖の如し

「刀は右脇へ置なり

提……と吟ずる時兩手にて持たる儘首を實驗する心持にて充分首と見る構へをすると圖の如し

「鉢巻をば首を掴たる樣に上下を握るなり

謁將軍……と吟じながら左足を引て膝をつく直ちに右足を前へ蹈み出し下より兩手にて首を實驗に供へる心持を見せる圖の如くにて畢り

「右三角へ差出して畢り

吾國民

義勇奉公吾國民　動員令出凛精神

衝天意氣已呑露　笑酌水杯應召辰

此詩も同じく征露歌と共に諸新聞に見えたり活氣縱横永く國民の吟唱すべき傑作なるを以て茲に圖解を附す

義……と吟ずる時直立して右手を拳になし圖の如く振り揚げ

勇……と吟じながら左足を左り前三角へ開くと同時に圖の如く右拳にて左の二の腕の所を打つべし。

「前に云如く直立して直ちに、詩を吟じながらに圖の樣になる

奉公と吟ずる時は左足を後へ引き兩足を蹈開き腰を屈め兩手を開き膝頭の邊より上へ頂く如き樣をなすと圖の如し

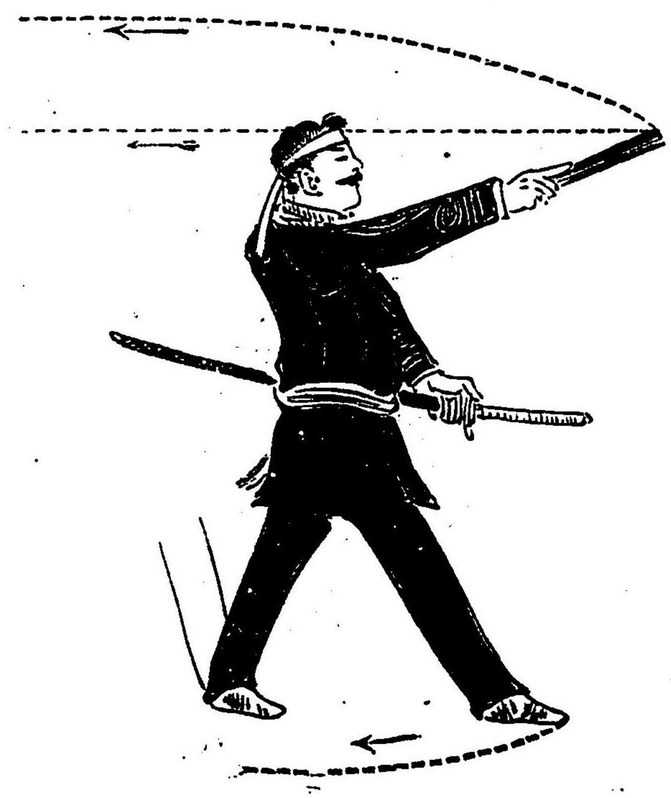
吾……と吟ずる時兩足を蹈揃へ左手は刀の鍔に拇指を掛け三角前へ突き出し直立の際下腹に力を入れ拳にて我胸を打と圖の如し

國……と吟じながら
左足を後へ引き膝
を突き
民……と吟じながら
左拳にて右の二の
腕を打つと圖の如
し

動……と吟ずる時左
手は刀の鍔に拇指
を掛け三角へ突き
出しながらにして
兩足を蹈揃へ右手
にて扇子に手をか
けながらつゝたつ
と圖の如し

員……と吟ずると共に右足を左三角の前へ大きく蹈込み右手は扇子を持て足先の向たる方へさし

令……と吟じて次圖の形より七圖へ移る事と知るべし

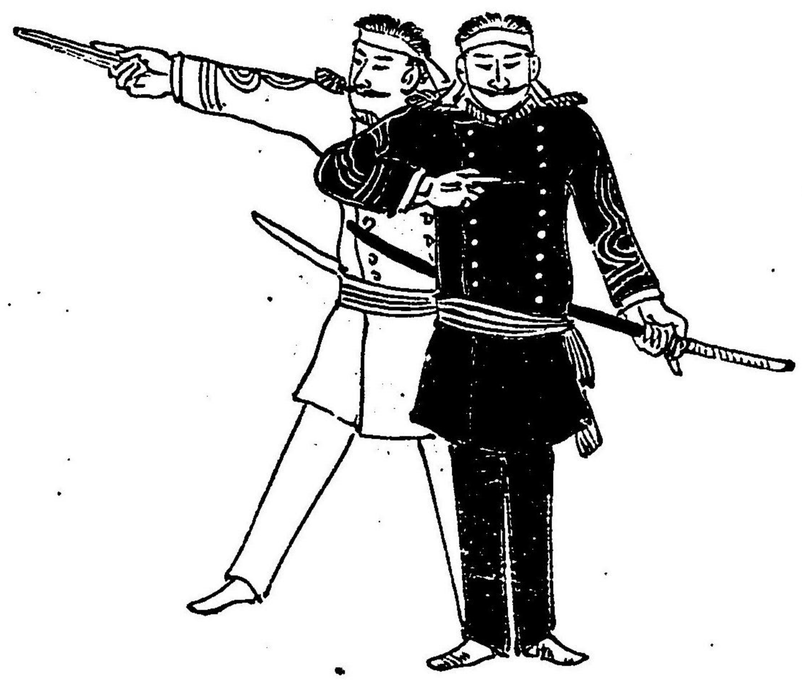


出……と吟じながら下腹に力を入れ心静に右足を大きく右三角後へ開くと共に扇子を持て圖の如き樣をなす

「尤も出て……と引いて吟じ止りと共に手足の形ちも止となり

精神……と吟じながら
兩足を蹈揃へ左手は
刀の鍔に拇指を掛け
左り前三角へ突き出
し足を蹈揃へると同
時に右手の扇子を以
て我胸を打

「尤神と吟ずると共に右足
を後へ引き又前へ蹈出す
と同時に次圖に移る



移りながら
凛……と吟じ右足
の前へ進むと共
に右手の扇子に
て左の二の腕を
打と圖の如し

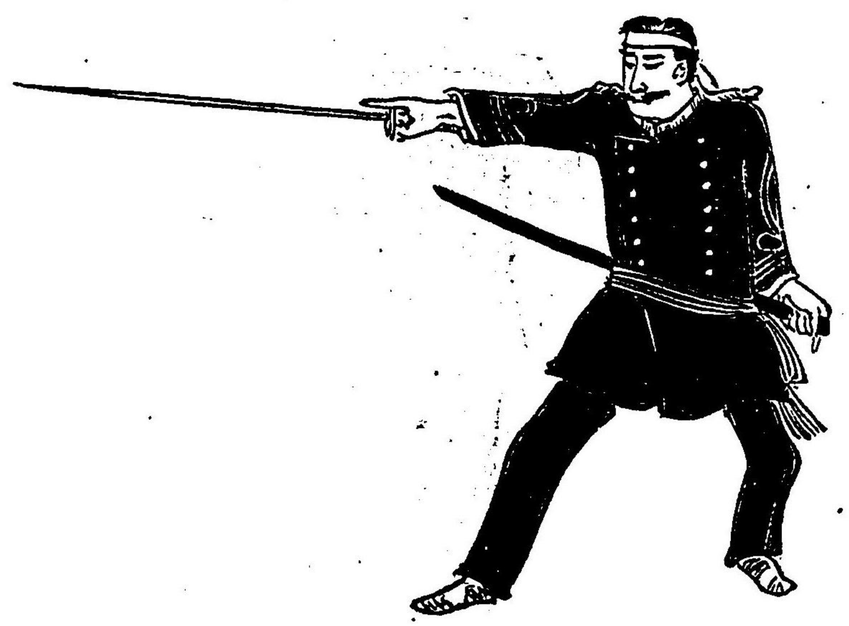
天……と吟じながら兩足を蹈揃へ兩拳しを乳の邊に押しあて

衝……と吟ずると共に右足を大きく開き兩手を開きながらにして天を衝く樣をなすと圖の如し

「活動圖の樣を好くすべし」

意氣……と吟ずる時兩足を蹈揃へながら左手は刀の鍔へ拇指を掛け前三角へ突出し右拳を以て我胸を打と圖の如し

已……と吟じながら左足を後ろへ引くと同時に居合腰にて刀を霞に拔放つと圖の如し



露……と吟ずると共に左足を前に一歩蹈出す同時に大上段に構へると圖の如し

呑……と吟ずる時右足を前へ一歩蹈込むと同時に下腹に力を入れ切り下すと圖の如くの構へになる

笑……と吟ずる時は刀を鞘に納めながらに左足を引いて膝をつくと共に腰なる扇子を取と圖の如し

「左足の爪先を立て我口門の處へ足のかゝとを附るべし

水杯……と吟じながら扇子を開き圖の樣をなして次ぎ圖の形ちに移る

酌……と吟ずると同時に扇子にて酒を呑樣をなすと圖の如し

召……と吟じながら手を伸したる儘にて扇子を疊むと圖の如し

應……と吟じながら右手は扇子を圖の如き樣に持左手も又圖の如く下につき辰　と禮をする形ちを爲して畢る

軍舞

軍舞主意

軍舞なるものは素と劍舞より割出して作りたるものにて、只劍舞に比較して何となく艶あり、又一種の味あるの差違あると見るも、更に異なる程の卑しきものにはあらず、而して此の軍舞の特色といふべきは、一人にても二人にても乃至十人にても百人にても、軍歌を唄ひながら大宴會或は劇場にて、壯士俳優など、此の手に依りて自在に舞ひ、又た軍人の方々休戰などの折、大群にて此技を演ずるとせば、一段の見榮を生じ、最も愉快の手引となることを得べし、且つ諸學生が遠足の折にも適當なる餘興となすべく、宴席等には又た歌妓輩に此の軍舞を演ぜしめたらんには隨分趣味の深くして一際見物なりと信ず、兎に角余は自ら苦心を凝して一ッの軍舞を考案し之を獨習圖解に入る

出征軍歌

決死の出立

適心齋義爲作

露は何事ぞ是迄は
今社彼等を懲むる
召に應じて勇立つ
幾歳彼等に侮られ
時の來るぞ我々が
去來出軍の傍らに

父母は病の床に臥し　妻兒の別れ何の其
國難何と見棄べき　我も敵地に進なば
元來骸は晒さんと　矢猛心ろの手束弓
武勇の譽は冥界の　土産となさん覺悟とは
旭に匂ふ櫻花　戎に匂ふ勇ましさ
四海に響日の本の　勳功他國に類なき
末の世迄も鑑ぞと　成しも皇の威光なれ

左に顯す處の軍舞獨習圖解なるもの殊に出征軍人決死の門出を擬したるものにて軍歌及軍舞ともに充分意を籠て圖の注解迄もなせしものなれば永遠日軍祝捷紀念として世に公に殘し留ん事希望するにな

露は何事ぞ　と唄ふ時は直立して諸手を上へ揚げ指をちがへ露國の軍旗に擬し

是迄は　と唄ふと共に左手は刀の鍔際を握り右足は右三角へ蹈込みながら右手にて下斜に指をさす

幾歳と唄ふ時は左足を左三角へ蹈込み左手にて年を算へ右手にて是を指さすなり

彼等に　と唄ふと共に左足を右足の元へ寄るや否右足を右三角へ蹈込みながら右の方を指さす

侮れ　と唄ひながらに活動圖の如く少身を後ろへそらせ頭も少し上を向て眼の上に拳をあて憂ひの躰を見せるなり

今こそ　と唄ふ時左足を左三角へ蹈込むと共に刀の鍔際を持たる儘突だし右手を拳にして左手の二の腕を勢込んて打なり

彼等を　と唄ふと共に下斜に指をさしながら右足を右三角へ蹈込む

懲しむる　と唄ひながらに活動圖の如く後へそると共に諸手を脊に廻し縛したる躰を爲すなり

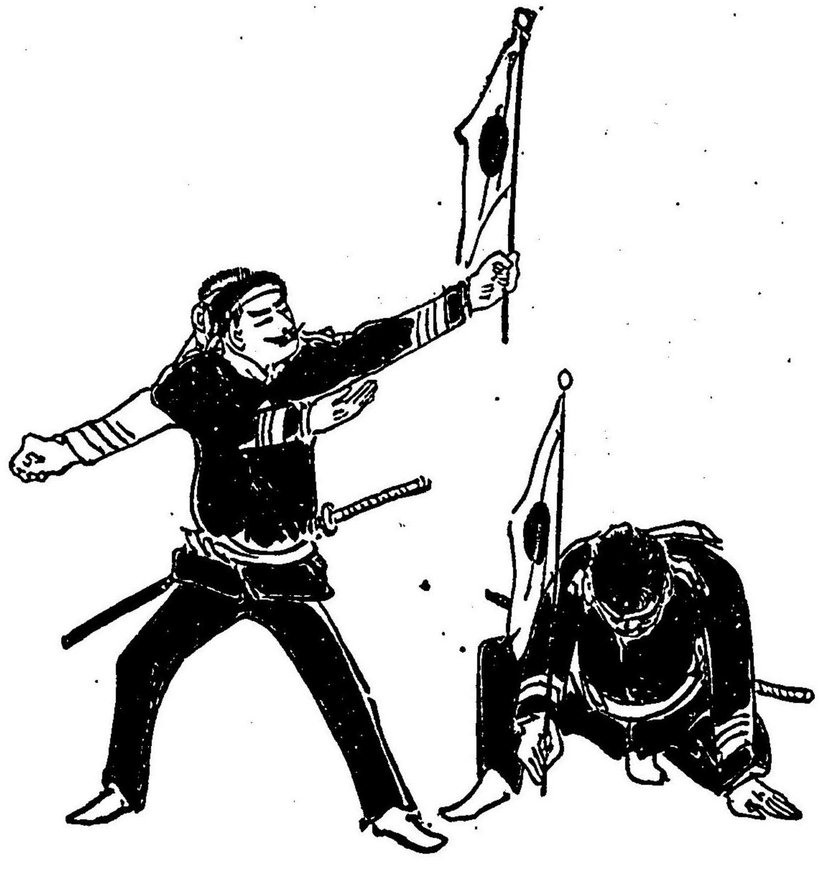
時の來るぞ と唄ふ時少し右斜に直立し諸手を廣げ指を寄ながら腕を組み

來るぞ と唄ふと共に正面へ向左足を蹈開くとたんに大手を廣げ

我々が と唄ひながら右足を左足の元へ蹈み揃へる同時に我胸を打事活動圖と點線と矢の印しと一二の番號とにて知らるべし

召に應じて と唄ふ時左の膝を突右の膝を建左手を平にして下に突右手に旗をたて持恭しく召に應ずる躰をあらはすなり

勇み立つ と唄ひながら立ちて左手へ旗を移し右手を挙にして活動圖の如く突張なり

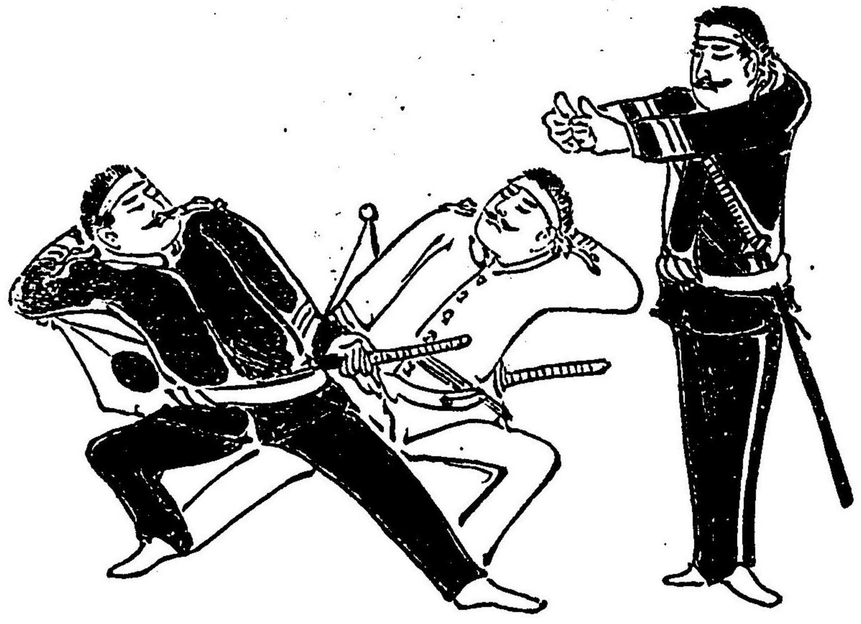


去來出軍の　と唄ふ時左手は刀の鍔際を握り右足を右三角へ蹈込むと共に旗を圖の如く突出すなり

傍に　と唄ひながら直立して脊に旗をさす事圖の如し

父母は　と唄ふ時少し右斜に直立して圖の如く諸手にて拇指を立てゝ突出すべし其順は少しく左手は前右手は後と爲こと

病の床に臥し　と唄ふと共に右足を蹈開きながら手を枕にして病の床に臥す樣を爲し此を父とす活動圖の如くするは母の心持なり



妻と唄ふ時右足を右三角へ踏込むと同時に小指を見せて圖の如く突出すこと

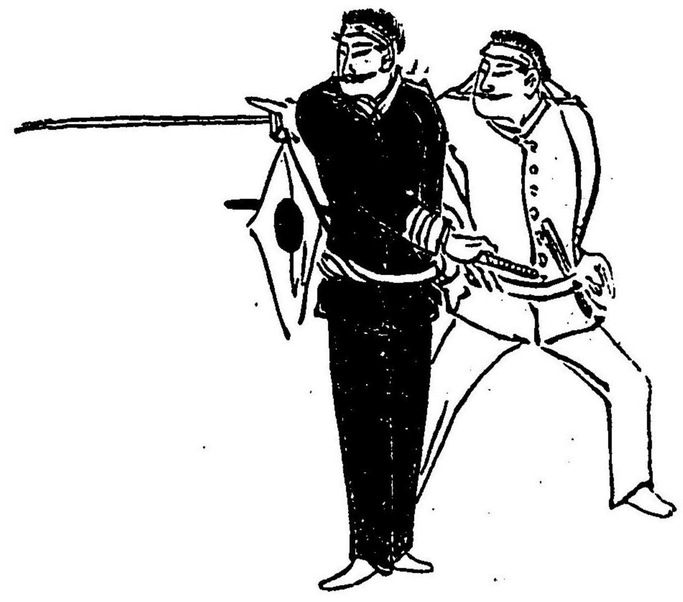
兒のと唄ひながら活動圖の如く小兒を抱ける体を爲すべし

別れと唄ふ時直立して少し右斜となり手の甲にて眼の上を押へ憂の躰を見せるなり

何の其と唄ひながら活動圖となつて左足を踏廣げ左手と同時に刀の鍔際を握りたる儘突出し右手は拳にして我胸を打事

國難と唄ひながら直立して

何と刀の柄に手をかけ忽活動圖の如く霞に振つけ其の儘次圖に移るなり



見捨べきと唄ふ時は霞の形より本圖に移りて大上段に振冠り切り下さずして柔かに下ろして次圖の形に移るべし

我もと唄ふ時右の方に寄刀を圖の如く持て左足を蹈出し

敵地に

と唄ひながら第二の活動圖の如く右足を繰出し

進みなば　と彌鋭く刀を突出すと共に左足も蹈込むべし　尤本圖の一活動圖の二三と印の順を見競ぶる事

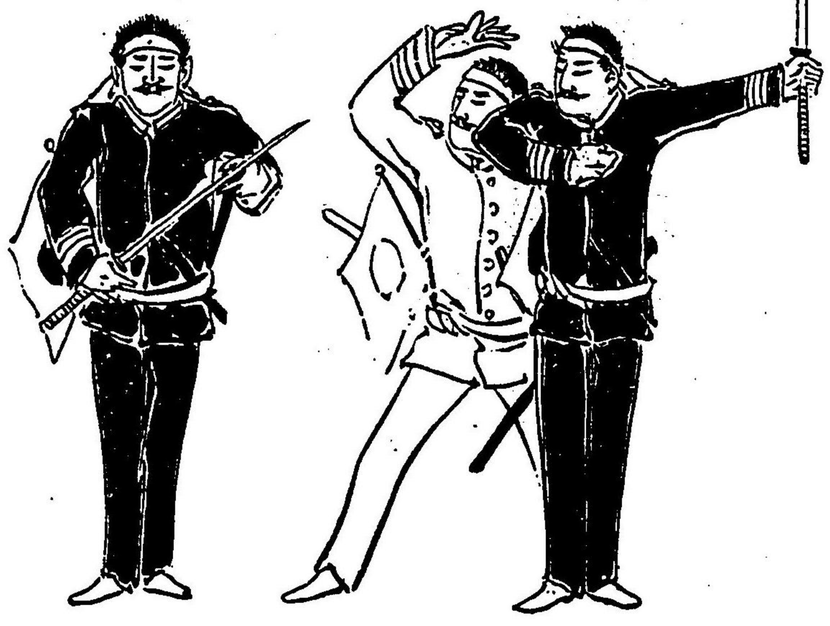
元來と唄ふ時直立して刀を左手に移し立て持

骸は　と唄ふと共に我胸を打ち

晒さんと　と唄ひながら右足を出し高く頭挿て見遣る形を爲すこと

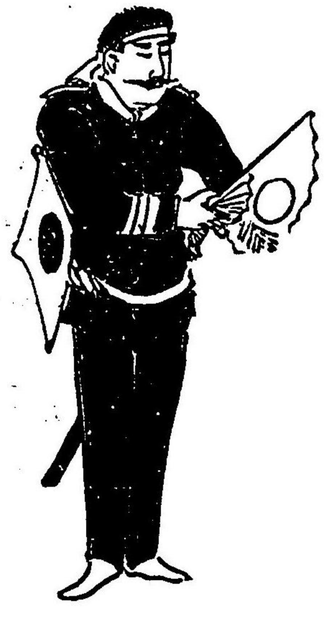
動圖の如し

矢猛と唄ふ時直立して刀を鞘に納めるなり



心の　と唄ふと共に刀の鍔際を握り扇子にて我胸を打ー　と同時に左足を蹈出し扇子を以て左の手の平を打ち手束弓　と圖の如く肩一文字に弓をひく形を爲事圖の如し尤下腹に充分力を入ることなり

武勇　と唄ふ時直立して扇子を開くべし　併ながら此は形と云ふまでのものにはあらず武勇のと唄ひながら扇子を開くと同時に次圖の形に掛ゝる程に舞込こと尤しかり



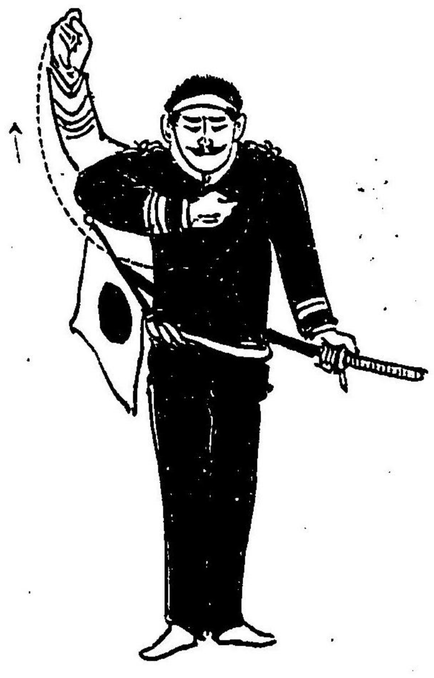
譽は と唄ふ時は早既本圖の形と成て扇子を揚右足を左三角へ少しく出し譽のれにて活動圖の如く右足を右の方へ大きく蹈み出すと共に扇子も大きく輪どりて高く頭挿と同時に瞬速に次圖の形に移るべし其歩びは活動圖と點線と矢の印とによりて見分くること

冥界に と唄ふ時に瞬速に本圖に移りて舞込むものにて冥と右後三角へ右足を蹈み込むと同時に界と脊を見せながら右足を元へ蹈開くと共に扇子を揚る事活動圖と點線と矢の印にて了知せらるべし

土産と　直立して扇子を畳み帯にさし

なさん　と唄ふ時拳にて胸を打ち

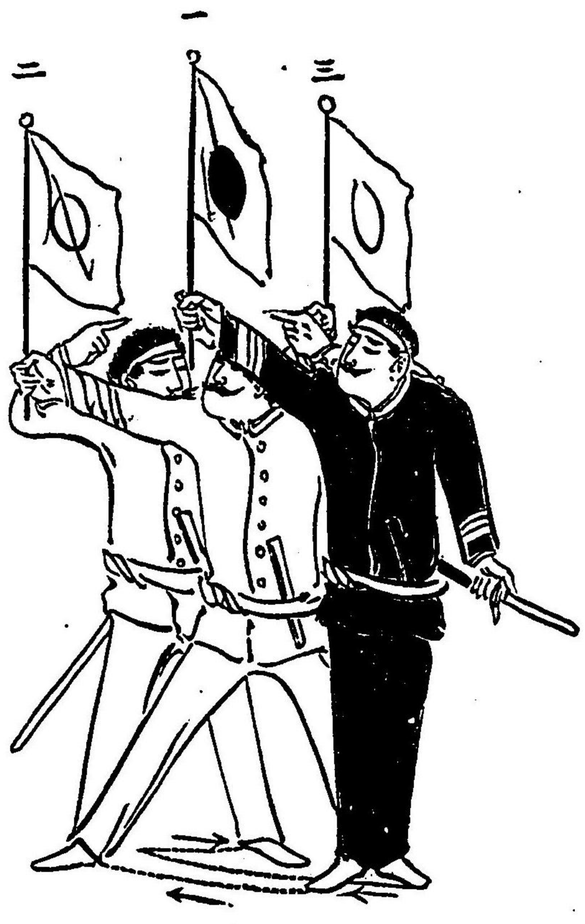
覺悟とは　と唄ふ同時に其拳をば活動圖と點線と矢の印との如くに振揚げ尤も下腹に力を入るべし



旭に　と唄ふ時は直立したる儘脊に挿したる旗を取り圖の如くに差揚て打見遣り

匂ふ　と唄ひながら活動圖の如く右足を蹈み出し左の手にて指をさし

櫻花　と唄ふと共に旗を左の手に移し左足を右の足元へ引くと共に蹈出し右の手にて旗の日章を指さすこと總じて活動圖と點線と矢の印の如し



戎に　と唄ふ時左片足にて立つと共に右手を拳にして振揚

匂ふ　と唄ふ同時に振揚たる拳にて揚たる右足の股の外平を叩くばづみに右足を下し

勇し　と唄ひながら拳を左の肩の當りへ突あげ其儘にて

さ　と第四の拳の如く突き出すこと活動圖と點線とにて順序を知らるべし

四海に　と唄ふ時右足を左へ蹈込み脊を見せ形になりて

響く　と唄ひながら正面へ向き直ると共に右足を右の方へ蹈込み

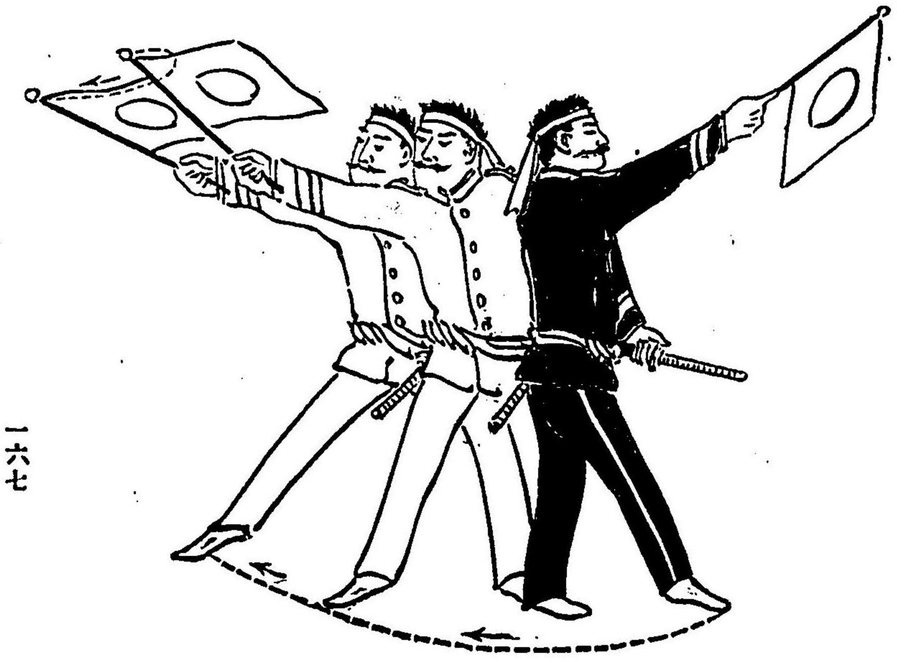
日の本　と唄ふと共に左の足元へ右足を寄ながら旗を捧直立して少下を向き

の　と唄ふて上を少し向なり何れも活動圖と點線と矢の印を見て順序を知らるべし

勳功　と唄ふ時左の膝をつき右の膝をたて恭しく旗を戴事尤其意を表するに足やう爲べき事なり而して次圖に移るに其儘旗を持たる手を伸ばして左三角へ右足を蹈込むが故に自然と構へを爲すにいたれり

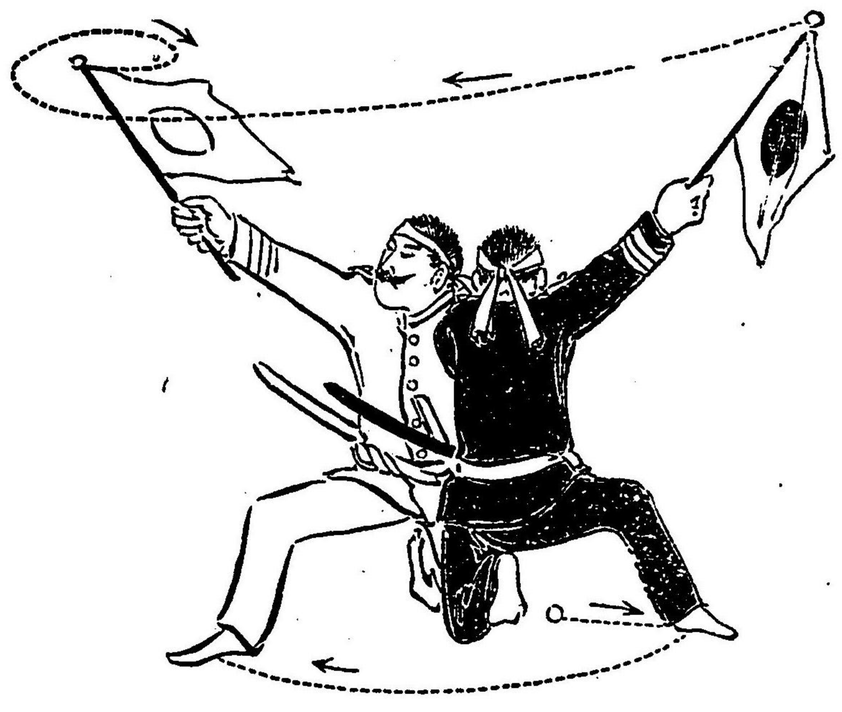
他國に　と唄ふ時は前に述る如く自然に本圖の躰となつて

類ひなし　と唄ひながら活動圖の樣となる尤躰の歩び又旗の振かた等總て點線及矢の印によつて見らるべし最も右向へ手足共に進むべし



末の世迄の と唄ふ時は正面を向き右手は正式の如く刀の鍔際を握り左の膝をつき右の膝をたて旗は右足の方へ圖の如く突たて點線の通り小輪に二ッ廻し

鑑ぞと と唄ひながら に活動圖の如く旗を持鑑となす意を表し其運びは矢の印によるべし

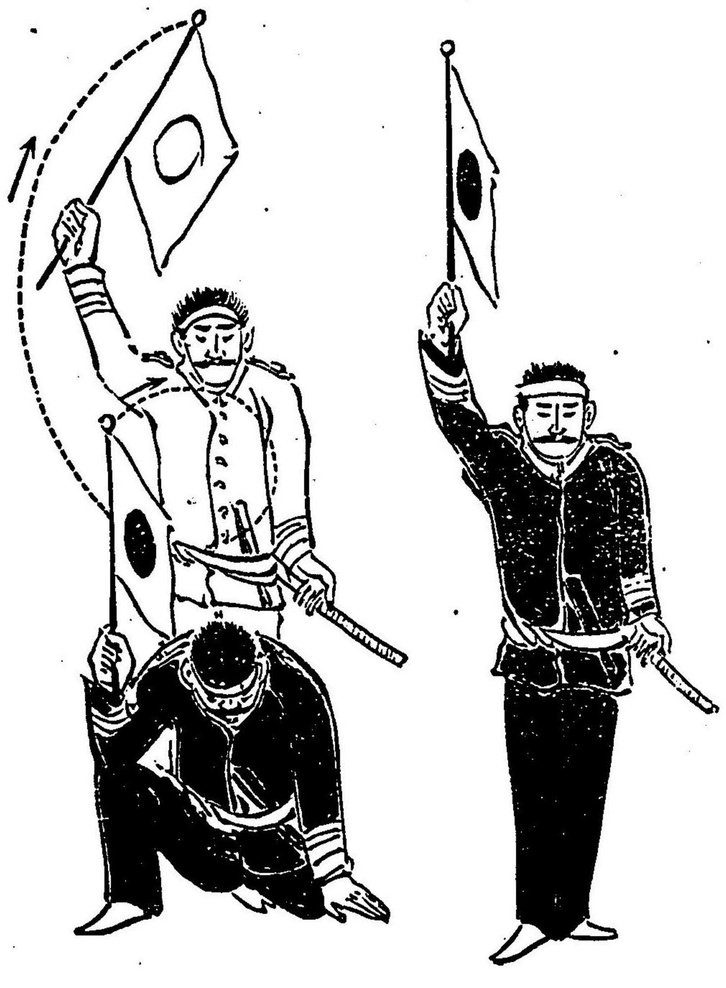


成しも と唄ふ時直立して右手を充分上に伸して旗をたて持て

皇の と唄ひながら に左の膝をつき右の膝をたて左手を下に つき右手は圖の如く旗を立て持恭しく皇

威光なれ に對する敬意を表し と唄ふ

と共に活動圖の如く差 上 立て旗を高く 頭 抑て と其運は點 線 と矢の印とによつて知ることなり尤大皇の御威光と云ふ心持を表して畢る



征露軍歌（二）

大和魂

我は日軍我が敵は
天地入ざるロシヤの國
譬へ鬼神の勇あるも
天の許さぬ暴虐の
饕を知らざる豺狼が
長く榮へし例なし
惡運盡きて滅亡の
時社來たれ今ぞ今
膺て懲する大和魂
命を棄るも君の爲
骸を晒すも國の爲
進めよ進め諸共に
旭の御旗を押立て
實に勇敢好男子が
玉ちる劍拔つれて
死ぬる覺悟で進むべし

S.M

此なる征露軍歌大和魂は吾輩が作せし處幸にも井口先生大に氣に入りさらば軍舞の一手を是につけんと早速にも舞の手は出來揚り吾輩一見する處勇壯活潑にして又情味濃やかなれば實に面白し直ちに見取圖を作りけるに先生は舞の手振の註解を入られたり

（附言SMとは本圖の畫伯中島春郊氏なり）

我は　と唄ひし時は直立して左手は刀の鍔際を握り鍔に拇指をかくるとは何時も定法なり右手は腰に置き

日軍　と唄ひながら鼻を指す同時に右足を蹈開き

我　と唄ふ時に右足を右三角へ蹈込み左り三角を指差

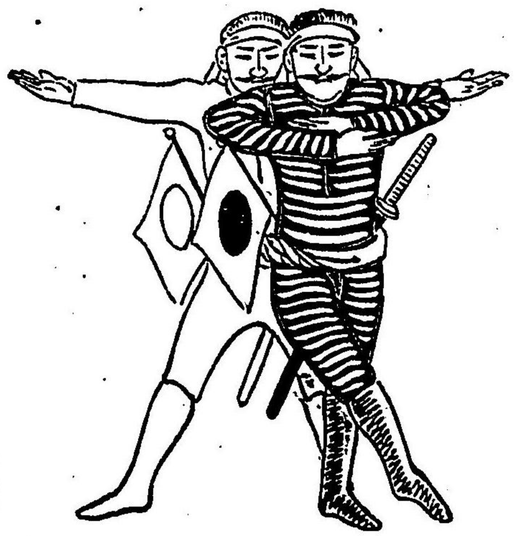
敵は　と唄ふと共に活動圖の如く右足を右へ蹈開き右三角を指差事圖の如し

天　と唄ひながら直立して仰向さまに右の手にて天を指差

地入れざる　と唄ふ時は下を向き地を指さすこと圖の如し

ロシヤの　と唄ひながら左三角へ右足を蹈込み右手を開きたるまゝ指を寄て右三角をさし

國　と唄ひて活動圖の如く右三角へ蹈み開き手を掲ること點線と矢印の如し



と唄ふ時は聊腰を屈め刀の柄の上を
擧にてしかと押へつけ　鬼神の　と睨み詰る心持にて　勇あるも　と唄ひながら活
動圖の構へとなりて身を少しそらし向ふを見遣躰をなすべし
天の　と唄ふと同時に直立して上を向天を指さす時は　許さぬ　と唄ひ直ちに活動
圖に移らんとする時　暴虐を　と右足を右後ろへ蹈開き握り拳を點線と矢の印しとの
如く大きく振廻して振揭るなり

壓を知らざる　と唄ふ時は直
立して左の方へ指をさし
豺狼が　と右の方をさし　長く
と唄ひながら右足を左へ出し爪
先にて立ち諸手を平にて組み直ち
に活動圖の如く右足は右の方へ蹈
み開き其儘兩手を廣げるなり
榮し　と唄ふ時は手を開き指を
寄諸手にて胸の返に圖の如くあて
其儘上へ衝きあげ
例なし　と又其儘にて下をさし
此順序は活動圖をよく見て知るべ
し

悪運　と唄ふ時は右足を揚左足にて立ち圖の如き一見醜き樣をなすと同時に

盡て　てと唄ふべし尤其處に立をるまゝにて次圖に移らんとせし際

滅亡の　と唄ひ圖に示せる如く宛然尻餅を搗きたる樣にて右手を突き左手を開きてさゝへる如くなし右足を折屈め立左足を灣曲の趣きに伸す形ちと知るべ

時こそ　と唄ふ時は直立して右てを後ろへ廻し

來れ　と旗を取り

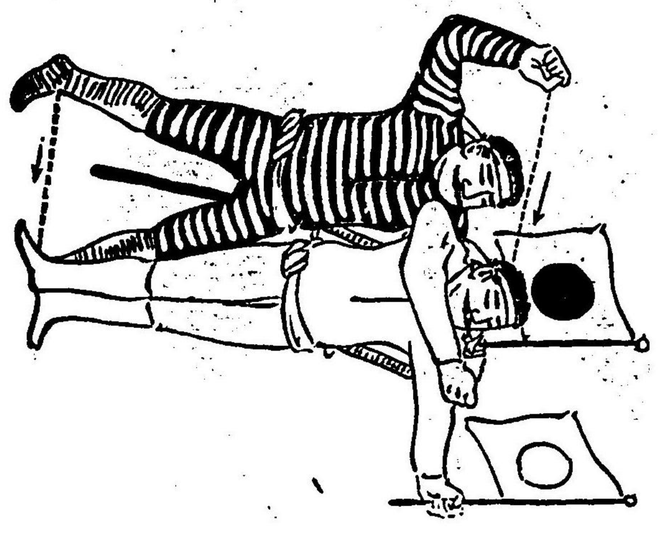
今ぞ　と右足を蹈み廣げ少しく反身に成て旗を振揚

今　と唄ひながら二度振るなり尤も振り方は點線と矢の印しとにて知らるべし

膺もと　時は左足を一歩踏み出すと共に左手に旗を立て持ながら拳を振揚

懲もと唄ひながら右足を左の足元へ寄ると同時に左の二の腕を打事活動圖と點線と矢の印とにて見らるべし

太和魂と唄ふ時は其儘にて我胸を打てと圖の如し



命を棄るもと唄ふ時は直立をしたる儘にて旗を腰にさし

君のと唄ひながら左りの膝を突右の膝を立て少し上を向き右の手にて戴く如き樣をなし

爲と唄ふと共に活動圖に移りて手を突く樣となる